

事業報告書 (令和 2年度)

事業名: 『再発見!おかやまの流域の生き物展』巡回展示企画2020—調べて伝えて考える

団体名 旭川源流大学実行委員会 担当者名 吉藤一郎

※活動の様子がわかる写真(データもお願いします)と説明を必ず添付してください。

1. 活動内容(日時、場所、参加対象者、人数、内容等)

2020年3月からコロナ禍対策により公民館の巡回展示を見送らざるを得なかった。表記の事業目的のため、「調べる」では以下の観察会及び調査を、「伝える」「考える」では2021年1月31日の総会講演会及び1年間の操山公園里山センターでの常設パネル展示を実施したので報告する。

「調べる」では、毎年恒例にしている行事である旭川中流域と宇甘川流域及び足守川源流部での早春の生き物観察会を2月9日(日)9時~17時に実施した。参加対象者は一般・高校生で、会のHPで呼び掛けて募集を募ったところ約10名の参加があった。自生地保護をしている絶滅危惧種のセツブンソウ群落とアテツマンサクの老木視察、ヤマアカガエル産卵湿原を観察巡回した。3月17日(火)11時~15時、国内で唯一岡山だけで発見され新種記載されたハルノマルツツトビケラ *Dolichocetrus sakura* Nozaki 2018の生息地である旭川流域において生息確認の観察会を会員5名で実施。旭川の源流部と中下流部及び旭川河口干潟において、底生生物に対する2018年7月豪雨の影響を見るべく、上中下流域では水生昆虫相を河口干潟では海生ベントス相を中心に一年間を通して巡回観察調査を実施した。また、2018年豪雨災害以来の生息が未確認となっているカワゲラ・トビケラの大型種の状況を新庄村を中心に2020年5月に複数回調査し、種数個体数共に減少を確認した。「伝える」では、一年間操山公園里山センター2階コーナーにおいて「森・川・海の生き物展」と題して活動パネル展示を実施し多くの入場者に好評を得た。また、2021年総会記念講演には倉敷市立自然史博物館の奥島雄一氏に「生物多様性の宝庫・次世代に伝える~博物館の世界」と題して講演を頂き、地域自然史情報の市民提供が大切なことと岡山市に自然史博物館が求められていることが参加者40名に共感された。

別紙添付資料では、当実行委員会の事務局である岡山野生生物調査会会報の「かざぐるま」第4号に活動写真があるので、それを参照いただきたい。

2. ESDの視点を取り入れたところ、ESDの視点で見直したところ

これまでの通り、県内の水環境を中心に、自然環境・生物多様性の保全の問題点に対して、「調べて」「伝えて」「考える」のスタイルで行った。瀬戸内海と児島湾の貧栄養化問題は、旭川の水質や生態系とどうかかわっているか。下水道整備などが貧栄養化問題にどうかかわるか。海の貧栄養化は、海苔色落ち問題や海藻減少による漁業資源の減少を起しているが、常に出入りがあり流動している森・川・海の生態系のバランスをどう持続性を持ちつつ良好に維持するか。人と自然の関わりの中で現状はどうなのかという視点。

3. 取組の成果(参加者にどのような意識や行動の教育上の成果があったか。感想など)

操山公園里山センターでのパネル展示を観覧された親子連れからは「身近な自然に面白いものがあったことに気づいた。もっと見てみたい」との感想。高島干潟近くの恒例の元漁協組合長は「壊された自然環境を何とかして取り戻したい」と願っていることが明らかになった。旭川の源流域から河口の高島干潟まで3つの研究調査報告を作成した。別紙資料として添付したが、いずれも未発表論文のため、まだ公開はご遠慮いただきたい。

4. 今後の課題と展望

旭川を中心に自然観察会や調査およびパネル展示会・シンポジウム・講演会などを実施しているが、会員の活動量だけでは県民の意識や県政市政を動かすことは難しく、さまざまな連携を追求していきたいと考えている。さらには、これまでの自然史研究と研究者の情報を市民が自由に利用できる情報バンク(地域自然史情報博物館)が必要とされていると考えている。地域を知ることが地域人の力を引き上げるはずだ。